

夏の陣

佐々木俊介

【第六回鮎川哲也賞佳作】

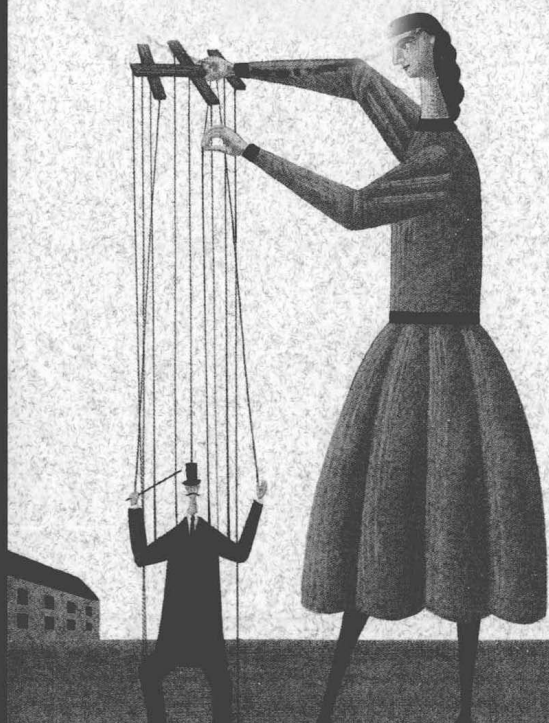


東京創元社

夏の夜の

佐々木俊介

【第六回鮎川哲也賞佳作】



まゆ 蘭 の なつ 夏



一九九五年九月二十日 初版

著 者 佐々木 俊介 (ささき しゅんすけ)

発行者 平 松 一郎 (ひらまつ いちろう)
株式会社 東京創元社

発行所

東京都新宿区新小川町一―五
郵便番号 一六二

電話〇三(三三六八)八三三二(代)
振替〇〇一六〇―九一―一五六五

製 版 フォレスト

印 刷 徳 沢 印 刷
製 本 鈴 木 製 本

乱丁、落丁本はご面倒ですが小社までご連絡ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章 姉弟 5

第二章 スリーピング・マードー 29

第三章 魔女に逢う 45

第四章 生きていた噂 65

第五章 もの言わぬ目 80

第六章 本堂達哉の話 93

第七章 水嶋悦子の話 115

第八章 芝草裕市の話 139

第九章 南真紀夫の話 156

第十章 インターバル 174

第十一章 山へ登る 181

第十二章 首を縊った少女について 192

第十三章 手紙と醜聞 215

第十四章 最後の手掛かり 232

第十五章 夏休み探偵の回答 252

終章 繭のような部屋で 285

第六回 鮎川哲也賞選考経過 297

選評 鮎川哲也 紀田順一郎 中島河太郎 300

繭
の
夏

装幀・装画
北見隆

第一章 姉弟

1

八月の暑い暑い日曜日、僕たちはカナリヤ荘へ越してきた。

*

♪長い手を不器用に伸ばし 赤いTシャツの女の子

恥ずかしげに歌を歌い 僕の耳にも届くよ

汗をかきオレンジをかじり 耳の後ろにかき上げた髪

ローラースケートで滑って回ろう 土曜日の公園の中

F Mラジオが流し始めた小沢健二おざけんじの向こうから、微かに今、声が聞こえた。たった一言、ねえ、とだけ言ったその声は、僕に宛てて発されたもののように思えたけれど、僕は読みかけの頁から俯うつむけた顔を上げることもせず、文章を追って移行してゆく規則的な眼球の動きを滞とどらせることさえしなかった。姉の声がどこか独り言のような調子だったからでもあるし、たまたま開いていた本というのが、僕にとって非常に懐かしいものだったせいでもある。

ウディ・アレンの『羽根むしられて』。

現在では文庫の体裁で簡単に入手できるこの短篇集だけれど、僕がさつきから手にしているのは、十五年近く前に初めて翻訳出版されたほうの奴だ。去年の春、高校へ入学して間もない頃、町田^{まちだ}の駅前にある古本屋で偶然に見つけたもので——その折に大笑いしながら二度ほど続けざまに貪り読んで以来、このナンセンスでひねくれた珍妙極まる作品集は、今日まで僕の前から忽然と(?)姿をくらましていたのだ。

堅いものから柔らかなものまで、次から次へと貪欲に読み漁るのはいいとしても、一度巻を閉じたとなるや、それら書物の管理がまるでいい加減なのが僕の悪い癖だった。姉の祥子^{しょうこ}に言わせれば、アンタに買われた本はこの世でいちばん不幸だわ、ということになり、確かにまあ、それには返す言葉のひとつもありはしないのだが、買い求めた本たちをそうそう気軽に処分できない性分の僕としては、せめてもう二、三倍大きな本棚さえあればなあ、というささやかな願いを胸に抱いているのも事実なのだ。

日々、増えていくばかりの本。ちっぽけな僕の本棚にはとてもじゃないが収まりきれず、手当たり次第、箱詰めになれ重ねられ、押入れの奥深く隔離されてきた、著者もジャンルもシリーズもてんで出鱈目な沢山の愛すべき小宇宙たち。

『羽根むしられて』もそんな中の一冊であり、今回の引越おかげで、実に一年と数か月の永きを経てようやく再会できたというわけだ。他にも、島尾敏雄^{しまおとしお}の『贗学生』、フィルポッツの『赤毛のレッドメイン家』、福永武彦^{ふくながたけひこ}の『廃市』など、もう一遍読み返したいとは思いつつ、取り出すのを億劫^{おつくう}がつてうつちゃっておいた作品は幾つもある。この先、久し振りの対面がまだまだ実現することを思うと、自分でもおかしいくらい僕の心は浮き立ってくるのだった。

♪誰かが髪を切っていつか別れを知って

太陽の光は降りそそぐ

ありとあらゆる種類の言葉を知って

何も言えなくなるなんてそんなバカなあやまちはしないのさ

磨り硝子の引き戸を隔てた隣の六畳間では『ローラースケート・パーク』が聞こえ続けている。適度なヴォリュームで届けられる小気味いいリズムとメロディーの遠くから、今また、ねえ、と声がした。柔らかで、くぐもって、奇妙に現実感を欠いた独特のハスキーヴォイス。それはやはり明らかに僕を呼んでいるものらしく、今度のは催促するような調子を帯びて、しっかりと両の耳に飛び込んできた。

「……敬、ちよつと、いるんでしょ？」姿の見えない姉は言う。「ねえつてば、いるならこっちは来てよ。おかしなものを見つけちゃったのよ」

苛立たしげな口調だった。眉根を寄せ、唇を尖らせたお決まりのむくれ顔が、その声色からたやすく想起された。

硝子戸の向こうで何が起きたのかは知る由もない。が、どのみち大したことじゃないのはわかりきっているのだ。僕は構わず、さらに数行を読み進めた。けれど、脳裡に浮かんだ姉の不機嫌な顔つきときたら、まったくもって集中力を減退せしめるのには効果的なのだった。

お気楽な内容にもかかわらず、目が同じ文章の上を二度三度と往き来し始める。馬鹿馬鹿しいほど真面目くさったへ笑いゝの味も味わえなくなる。元々、悠長に本など読んでいる場合じゃな

いという負い目もあった。それで、つまるところ、とうとう僕は降伏せざるをえなくなったのだ。
った。

やれやれといったふうのことさら大きく溜め息をつき、座り込んでいた蒸し暑いキッチンのフロアから重たい腰を持ち上げる。映画『影と霧』の元ネタになった戯曲の手前で本を閉じ、梱包された荷物の山の隙間を擦り抜けて、滑りだけはやけにいい扉をガリりと肩幅に開ける。真新しい畳の匂いも清々しい部屋の奥、空っぽの押入れの上段で、白いTシャツ姿の祥子は、案の定、眉根を寄せ、蛸みたいに唇を尖らせて、ちんまりとこちら向きに正座していた。

「……何してんだよ、そんなところで」ぶっきらぼうに僕は言った。

「何って、水拭きしてたのよ。汚れがすっごいんだもん」

子供っぽい容貌には似つかわしくない掠^{かす}れ声で、まったく始末に負えないという風情で姉は答える。その言葉通り、彼女の手には薄汚れた雑巾が握られている。

「押入れの中を水拭きなんかしていいのか？ 黴でも生えてきたらやだぜ」

「黴？……ねえ、アンタってばさあ、時々主婦みたいなこと言うよね。平気だよ、この暑さだもん。拭いてるそばから乾いてくんだから」

見て見てこんなになっちゃったんだよ、と眉をしかめながら、それでも姉はどこか自慢げな様子で、真っ黒けの濡れ雑巾をこれみよがしに振り廻してみせた。

色白で化粧つけない、こぢんまりとした丸顔。クルクルとよく動く、少し吊り気味の大きな瞳。二重瞼で黒目がちのそれは、幼さを醸し出す大本^{おもと}でもあるのだ。

高校生といっても通りそうなぐらいの年恰好をしている彼女だが、実際のところは、先月の末に二十二回目の誕生日を迎えたれっきとした最高学府の四年生だ。身長の低さと華奢な体型も手

伝つてか、この姉の存在は第三者にはおおむね愛くるしい印象をもつて迎えられてゐるようだった。それが証拠に、弟と違つて彼女はなかなかモテるらしいのだが、小憎らしいほど生意気なその性格を熟知している身としては、みんなすつかり騙されてるよなあ、というのが偽らざる心境だつたりもするのだ。

僕は姉を敬う気持ちなどカケラも持たない不屈きな弟だったから、普段から五つ歳上の彼女のことを、「祥子、祥子」と呼び捨てにして平気でいた。一方、向こうはこちらのことを、機嫌のいい時には「敬ちゃん」と、そうでない場合には、「敬太郎」もしくは「敬」と、まるでベツトに対するがごとき尊大な口振りでもつて呼ぶ。

多くの姉弟がおそらくそうであるように、僕と祥子は時に些細な口喧嘩をし、ある部分ではまるで関心の対象外であり、また別のところでは、暗黙のうちに一定の距離を保ちつつ、それでも今日までけつこう仲よくやつてきた。お互いがお互いにとつて唯一の「家族」であるということ。それが姉弟としての親密感に結びついているのは、どうやら間違いないらしい。

押入れの中の祥子に改めて目を向けると、緩くウェーブをかけた髪の毛にあたかも演出したごとく綿埃を付け、けれども表情だけは妙に鹿爪らしくして澄まし込んでゐる。サークルで下手な演劇をやっている彼女にはなかなか相應しいシチュエーションであると、言つて言えないこともない。

(こんなところで芝居してら……)

声にせず呟いてから、僕は敷居に土踏まずを預けて言つた。

「暑いな。暑すぎるよ。クーラーなしじゃあやっぱり暮らしてけないぜ」

「アンタ、この季節に長袖なんか着てるからでしょ。暑いならさっさと脱げばいいじゃないの」

祥子は素っ気なく切り捨てた。突き出した丸い顎の先端が、僕の羽織った綿シャツを指している。おととい、秋口になつたら着るつもりで買ってきたモノトーンのギンガムチェック。時期尚早を承知の上でついつい待ちきれずに袖を通したのはいいけれど、やはりこれは、ずいぶんと馬鹿げた行為に違ひなかつた。

八月十四日、日曜日。

あと二週と半分を残した夏休み的一天。

今日もまた、昨日までと同様に、いや、それ以上に暑かつた。何しろ今年の夏ときたら、例年にもまして気合の入り方が半端じゃない。連日連日、空は素晴らしく晴れ渡り、蟬たちは壊れた玩具みたいに啼き狂い、いつかこの季節が過ぎ去っていくことなんて、現在の僕にはそれこそ想像もつかないことなのだ。

今、目の前の室内には何も無い。軽快なリズムを刻むCDラジカセと、濁った水の入った青いバケツの他には本当に何も無い。カーテンの付いていない窓が思いきりよく開け放たれていて、コンクリートの手狭なヴェランダが見える。そこから時折のそよ風を伴って侵入してくるのは、容赦ない昼下がりの光と熱だ。強烈な陽射しが、押入れからソノソと顔を覗かせた祥子の髪を――栗色にマニキュアした肩までの長さの髪を――いつそう明るく照らし出していた。

「ところで、俺のこと呼んだら？」

そう訊ねるや姉は間髪を容れず、「呼んだわよ何度も」と、ひどく突っけんどんな答え方をする。

「何。何か用」

「用があるから呼んだんじゃない。ね、ちょっと見てほしいものがあるのよ」

ホラ、と言つておもむろに彼女が取り上げ、差し出したものに目をやれば、それはさつき振り廻してみせたのとは別物の、けれどもやはり汚れ放題に汚れたひと塊かたまりのボロ布なのだった。

「これ、何だかわかる？」いかにも腑に落ちないというように祥子は言つた。「おそらく以前の住人が忘れていったものだとは思ふんだけど、でも、それにしても妙なの。どうしてこんなところに入れといたんだろ。不思議だよ。おかしいわね。ねえ、アンタもおかしいと思うでしょ？」

（おいおい、おかしいのは自分のほうだろうが……）

いつものように僕は胸の内で愚痴つた。わざわざ人を呼びつけておきながら、その喋る言葉ときたらまるで独り合点の域を出てやしない——生憎だが、彼女が何を言わんとしているのやら、僕にはとんと見当がつかねた。

「何だつて？ 何を言つてんだよ。こんなとこつて、どんなとこだ？」

「だから、ここよ。この押入れの……」

じれったそうに説明しかけた祥子は、けれど、ふいにそこで僕の左手に視線を移したかと思うと、次の瞬間には、声のトーンをグツと跳ね上げてこう喚き出していた。

「あーっ、コイツ、真面目に働いてるのかと思つたら本なんか読んでるのっ！」

さつき僕のシャツを指し示すのに用いた顎をまたぞろ上向かせ、彼女は咎め立てるように鼻を鳴らした。両の瞳はもちろん、キツとばかりにこちらを睨めつけてやまない。

「もう、何でアンタはそうやってすぐにサボリたがるのよ。だいたい本なんていちばん最後に整理すればいいモノじゃない。何で真っ先に開けちゃうのさ、馬鹿」

「読んでたわけじゃないんだよ。ただちよつと、パラパラッとめくつてみただけで……」

手にしたままのウディ・アレンを遅ればせながら背中へと廻し、僕はひどく説得力に乏しい言

い訳を吐いた。が、読みかけの頁に人差し指を挟み込んでいるところまでしつかり目撃されていたような気がしたから、自然、言葉の終わりは口の中で尻すばみに消えた。

「怠け者」憎々しげな顔で姉は追い討ちをかけてくる。

「いや、そうは言ってもさ、俺、この本ずつと探してたんだぜ。どこにしまったのかわかんないもんだから、いつそのこと、もう一冊文庫判の奴を買おうかな、って考えてたところだったんだ」
「馬鹿ね、だからつてすぐに読み耽^{おぼ}つちゃつてどうするのさ。そんなことしたらいつまで経つても片づきゃしないじゃないの。今日からここで寝起きするんだよ。そこんとこ、わかつてんの？」

「わかつてるよ。でも、ほんとに出てきてくれてよかったと思って……コレ、去年の春先に町田の古本屋で買ったんだよ。何て言ったかな。駅前にある、ビルの三階の広いところ……」

「高^{たか}原書店でしょ」こともなげに祥子は言った。「説明されなくなつて知つてゐるわよ、一緒に行つたんだから」

「一緒に？ そうだっけ」

「そうだよ。信じられない、憶えてないの？」

「憶えてないな」

「ほら、目醒まし時計が壊れちゃつて、東急ハンズに新しいの探しに行つたことがあつたでしょ？ その帰りに寄つたんじゃない。あの時、あたしも何か買ったはずだけど、何だったかな」

「知るかい、そんなこと。自分で買った本は忘れちゃつたのかよ」

「たぶん、ケルアックの『路上』だつたと思うけど……」そう呟いてから、姉はみずからの憶測に忙^{せむ}しなくかぶりを振つた。「ううん、違う違う。そうじゃないな。あれは下北沢^{シモギタ}で買ったんだ

つけ。ということとは、何だろ？」

「さてね。何だつていいよ、別にさ」

「いやよ、落着かないもの。ええとね、そう……『PLUM』のバックナンバーだったかなあ……」

「『PLUM』って、音楽雑誌の？」

「そんな気がするんだけど、違ったかしら」

「知らないって。そういうことにしとけよ」

「気になるな。何だったつけ……」

置物のごとく正座したまま祥子はウーンとひと声唸^{うな}った。それから数秒の間、彼女は消化不良を起こした猫みたいな表情で、僕の胸のあたりに冴えない視線の先を彷徨^{さまよ}わせていた。が、やがて、「ああ、そうそうそう！」と大仰に頷いたのをきっかけにして、今度は打って変わった晴れやかな声色で威勢よく喋り始める。

「そう、やつぱりそうだ。『PLUM』だったわ。思い出した思い出した。アレ、有頂天^{うちようてん}の記事が載つててさあ、それであたし、どうしても欲しくなっちゃったんだよね」ああスッキリした、と、姉は満足げな、加えて懐かしそうな笑顔を見せる。「ウン、あの頃はホント毎日のように聴いてたもんね。有頂天と、あとはそう……ZELDAとかね。流行^{はや}りの曲なんか最悪につまんないのばかりだったし、もう今の音楽界には絶望だ！　って憤慨したりしてさあ」

「そーいや祥子、周りにこの良さを分かち合える人がいないのよお、って嘆いてたもんな。音楽の趣味なんて十人十色でいいのに、無理やり聴け聴けって勧められてさ、俺、いい迷惑だったんだぜ」

真向かいに開いた窓の外を眺めやりながら、ここで僕はゆつくりと室内に歩を踏み入れた。部屋は高台の三階にあつたから、僕の位置からはヴェランダの囲いが邪魔をして青く澄んだ空しか見えず、そこには今、雲ひとつ漂っていなかった。

「だけどねえ」押入れの姉は苦笑混じりに言う。「考えてみたらあたしたちつて、いまだに同じようなこと言ってるんだよね。相変わらず、近頃は聴きたい音楽がないね、なんて愚痴ってるじゃない。何だか年寄り染みた姉弟って感じがしないでもないわよね」

「まあね。でも、実際その通りなんだからしょうがないよ。売れてんのはドラマかCMのタイアップ曲ばかりだし、クラスの連中はそれ聴いて喜んでるみたいだけど、俺なんかますます絶望の深みに嵌まっちゃまってると感じるもんね」

「やあねえ、セイシュン真つ盛りの癖して。そのうちアンタ、友達失くすよ」

「だってさ、今聴けるのっていったら、それこそ小沢健二ぐらいだぜ」

「うーん、そう？ 或いはただ単に、知らないだけ、気づいてないだけ、ってことはない？」

「気づいてない、って？ 他にももつといいモノがある、ってこと？」

「ああ、そうでなくちゃ困っちゃうってこと……ねえ敬ちゃん、小沢くんのライブ、行きたい？ チケット取って、一緒に行こうか」

「ライブかあ。まあ、別に行ってもいいんだけどさあ……」

どうせ客席は喧しい女ばかりなんだろうなあ、と勝手な想像をし、早くも変に肩身の狭い想いに捉われ出した僕は、どっちつかずの煮えきらない返事をした。それから『羽根むしられて』を真新しい畳に放ってぞんざいに長袖シャツを脱ぎ捨てると、すでに『ローラースケート・パーク』を終えて次の曲を流し始めていたラジオ番組を、右の爪先でカットアウトした。